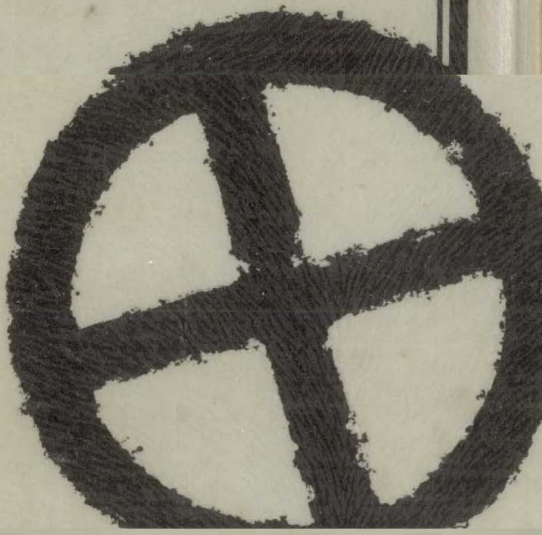


西郷隆盛　明治維新編

猛虎の巻

書名	西郷隆盛 猛虎の巻
著者	林　房雄
定価	四三〇円
発行所	徳間書店 東京都港区新橋四の一〇
発行者	徳間康快
発行日	昭和四十二年三月十五日発行
印刷所	図書印刷株式会社
製本所	大口製本印刷株式会社
製函所	岡本紙器加工所

乱丁，落丁がありましたらおとりかえいたします。　©林　房雄

西郷隆盛

明治維新編＝猛虎の巻

林房雄

西郷隆盛／目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

猛虎の巻＊＊＊＊目次

第一章　五危＊＊＊＊9
第二章　東海先鋒軍＊＊＊＊25
第三章　猛虎＊＊＊＊45
第四章　江戸の黄昏＊＊＊＊70
第五章　対決＊＊＊＊85
第六章　寛典＊＊＊＊112
第七章　動乱＊＊＊＊132

第八章　逆風＊＊＊＊150
第九章　彰義隊＊＊＊＊170
第十章　霖　雨＊＊＊＊183
第十一章　上野戦争＊＊＊＊204
あとがき＊＊＊＊233
年表＊＊＊＊237

挿絵・風間　完／装幀・上口睦人

猛虎の巻

第一章　五　危

障子の向うに、うすい月がある。二月に入れば、京都も春だ。おぼろな月影の中で、梅がつぼみをふくらませているはずだが、西郷吉之助にとっては、この春は月にも花にも無縁な毎日であった。

日本は二つに割れている。徳川慶喜が大阪城を捨てて江戸に去ったことは、かえってこの分裂を深めた。緒戦の奇勝は必ずしも終局の勝利を保証しない。戦線は西にも東にも、さらに東北にもひろがりつつある。日本統一のための決戦は、これからはじまる。

西郷吉之助は藩邸の一室で、行灯の灯芯をかき立て、机の上の書類をにらんでいた。ときどき溜息に似た吐息が出る。緊張の吐息であった。

『今度、慶喜以下、賊徒ら江戸城へ遁れ、ますます暴逆をほしいままにし、四海鼎沸、万民塗炭におちんとするに忍びたまわず、叡断を以って、御親征仰せ出され候』

二月三日付けで発せられた御親征の詔書である。

『而して、その部署は左の如し。

親征大総督府

大総督　有栖川熾仁親王

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

参　議　正親町中将公董
同　西四辻大夫公業
同　西郷吉之助
同　林玖十郎
錦旗奉行　穂波三位
同　河鰭大夫

東海道先鋒兼鎮撫総督府
総　督　橋本少将実梁
副　総　督　柳原侍従前光
参　謀　木梨精一郎
同　海江田信義

東山道先鋒鎮撫使
総　督　岩倉大夫具定
副　総　督　岩倉八千丸具経
参　謀　板垣退助
同　伊地知正治

廊下に不揃いな足音をひびかせて、背のひくい男が部屋に入って来た。足はちんばで、目は片目、顔はあばたでゆがんだ異相の軍略家伊地知正治であった。

「やあ、お暇かな。ちょいと話に来た。……いや、用件ではない。ただの話だ」
伊地知は机の向うにあぐらをかき、ふところから一冊の青表紙の本をとり出して、「出発の前に、こいつを読んでおいてもらおうと思ってな」
『孫子』第八巻九変篇であった。
吉之助は首をかしげて、
「孫子なら、何度も読んだつもりだが……」
「そう、おまえは島に流される時、八百冊の本を持って行った。おれよりも学者だ。……しかし、孫子は読んで忘れてしまったのではないかと思える節がある。すこしにがい話になるが、聞いてくれるか？」
「聞こう」

*

「まず、読もう」
伊地知正治はすわりなおして、
「将に五危あり。……必死は殺され、必生は虜にされ、忿速は悔られ、廉潔は辱しめられ、愛民は煩わさる」
「それがどうした？」
「将軍たる者の心得だ。おまえもいよいよ親征大総督府の大参謀になった。……およそ、この五者は、

将の過ちなり。用兵の災いなり。軍を覆えし、将を殺すは、必ず五危を以ってす。察せざるべからざるなり」

「……」

「おまえの説法ぎらいはよく知っている。だが、永年の仲間の言葉として聞いてもらいたい。吉井幸輔も心配している」

「吉井も？」

「おれは軍学の立場から、吉井は糧食と軍資金をあつかう総軍賦役の立場から心配している」

「話せ」

「おまえの場合には、五危のうち二危だけが心配だ。必死と愛民の二危——これがおまえの長所で、すなわち短所だと、おれも吉井も考えた。必死の覚悟にこり固まりすぎている者は殺され、民をあわれみすぎる者は無用のごたごたに巻きこまれる」

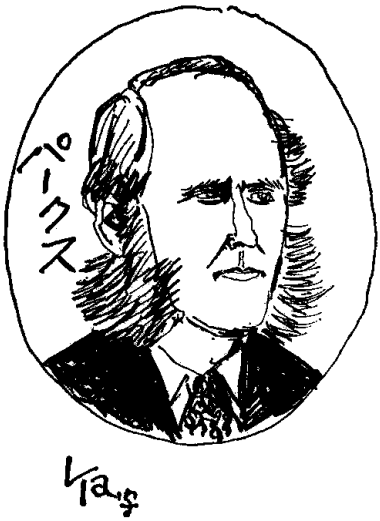
「よくわからん」

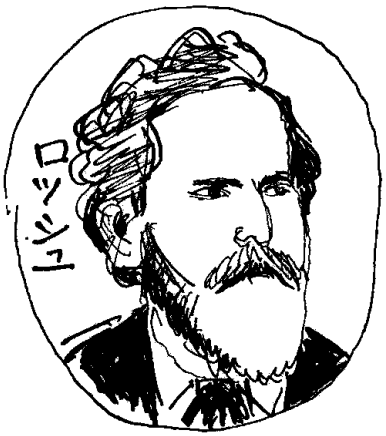
「わかってくれていると思うが……」

「伊地知、物は、はっきりと言え。おまえが言いたいことはなんだ？」

吉之助の目が光った。「何を遠慮する。おれの欠点を言ってみろ！」

「おまえには、昔から死にいそぎのくせがある。必死は殺さる。……死ぬ覚悟は結構だが、死にいそぎは困る。昔のことは言うまい。最近のことを言おう。蛤御門の戦いの際にも、おまえは総大将のくせに前線にとび出して行って、鉄砲傷をうけた。今度もどうだ？　総本営におるべき身が伏見の前線





に出て行って、大久保はじめおれたちをはらはらさせた。それでもこりずに、また抜け出して淀の前線に行き、藩公の御叱責をうけたではないか！」

「わるかったな」

「わるいも何も、大将が兵に先んじて死地におもむくのは、五危のうち最悪のものだ。絶対にゆるせぬ！」

「なるほどな。気をつけねばなるまい」

吉之助は微笑して、「ところで、おれの方から頼みが一つあるのだが……」

「聞こう」

「親征大総督府の参謀を長州の広沢真臣にゆずりたい」

「なぜだ？」

「薩摩だけが出しゃばってはいかん。例えば岩倉具視卿だが、東山道先鋒総督と副総督に自分の息子二人を任命したのはよろしくない。兄の方はまだいいとしても、弟の八千丸はまだ子供だ。不公平きわま

る人事として公卿のみならず、諸藩士のあいだからも攻撃の火の手があがっている。……大総督府には、ぜひ長州を入れねばならぬ」

*

「よかろう」

伊地知はうなずいて、「木戸が出て来ないのなら、広沢に出てもらおう。品川弥二郎では大総督府参謀には若すぎる。……それで、おまえは？」

「おれは東海道先鋒軍にまわしてもらう」

「いかん、いかん。それが死にいそぎだ。五危の最たるものだ」

「ちがう、ちがう」

吉之助は首をふり、明るい笑顔になって、「おまえの忠告は胆に銘じておく。もう決して、前線の鉄砲玉の中にとび出すような真似はせぬ。……ただ、おれはな、会議というやつがいかにも不得手だ。上下を着て御所や大本営にすわりこみ、お公卿さんや殿様を相手に、いかがでございましょう、いかにも左様でございまする……などとかしこまるのは性に合わぬ」

「おまえには、ぜひとも大総督府にすわってもらわねばならぬのだ。身勝手なことを言うな！」

「身勝手かな。すこしちがうようだな。おまえも軍師なら、適材を適所に使うがよい。大総督府は大久保と吉井にまかせておけばいいのだ。岩倉卿もいる。……おれには先鋒軍が適任だ。伊地知、今日は二月の十日だ。橋本卿の東海道先鋒軍は正月の五日に出発しながら、いまだに桑名で停滞している。

なぜ早く駿府(静岡)に入り、箱根を制圧しないのか」
「援軍を送らずに、先鋒だけを進めるわけにはいかん」
「援軍の準備は整った。早く先鋒を動かせ。おれは村田新八と桐野利秋をつれて、明日にも桑名に行きたいと思う。行かせてくれぬか」
「あと数日で本隊は動く。何でそのようにいそぐのだ？」
「伊地知、よく考えろ。この一カ月間に、幕府は陣容をたてなおした。勝海舟と大久保一翁が第一線に出て来た。油断はならぬぞ。この二人は智もあり勇もある大人物だ。まごまごしていると、背負い投げをくわされる。先鋒軍を橋本、柳原などのお公卿さんや有村俊斎(海江田信義)のようなあわて者の茶坊主にまかせておくわけにはいかん。その上……」
「その上？」
「敵は幕府だけではない。フランスとイギリスがいる！」
「……」
「ロッシュが動き、パークスが動いている。二人とも、今ごろはもう横浜だろう。江戸に乗りこんでいるかもしれぬ。どっちも外国人だ。日本のことは考えておらん。ロッシュは幕府方だが、パークスは朝廷の味方だなどといい気になっていたら、とんでもないことになる！」
吉井幸輔が入って来た。
「やあ、だいぶもめているようだな。……西郷、何をごてているのだ？」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com